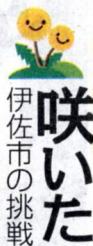


たんぽぽ



伊佐市の挑戦

咲いた

④

「産まなきゃよかった」

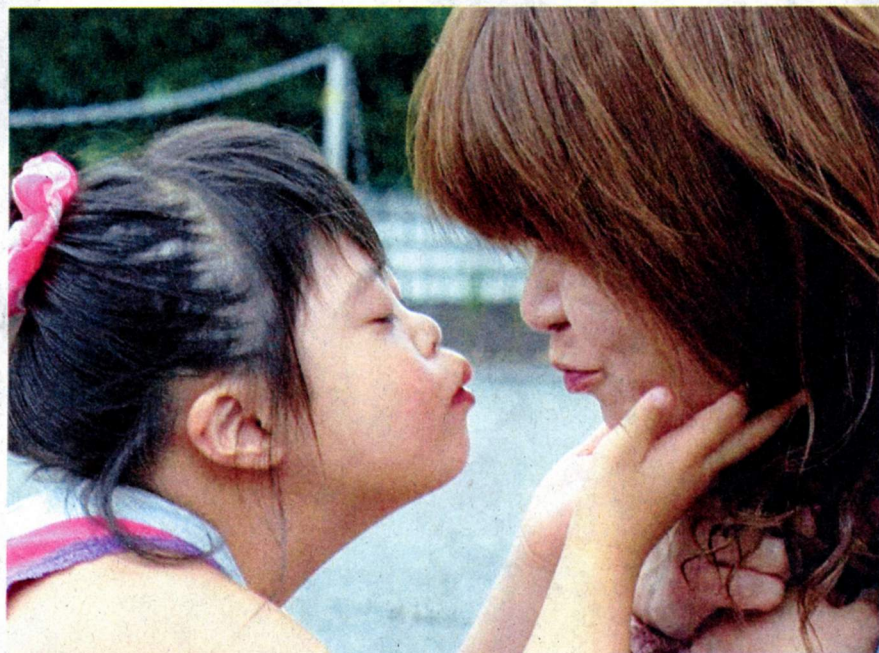
生駒圭子さん(42)は、生まれたばかりの長女蓮佳ちゃん(6)を見つめ、何度もそう思った。結婚10年目で授かった我が子。分娩台で、医師から「ダウン症かもしれない」と告げられた。

「明るい将来像が描けず、2人だけで過ごす時間がつらかった」。生後6か月の蓮佳ちゃんを連れ、たんぽぽに駆け込んだ。

寝返りを始め、お座りができるようになった。ほかの子より遅くても、ゆっくり、ゆっくりと成長した。「この子はずっと何もできない」。そう思っていただけに、小さな成長も大きな喜びだった。

蓮佳ちゃんは、初めて会う

「産んで良かった」絆強く



大好きなママにチュッ。生駒さんと蓮佳ちゃんの笑顔がはじけた

同じ悩み共有 心が軽く

人が苦手だ。以前は初対面の人を見つけると、走って逃げていった。でも、たくさんの友達とスタップに囲まれ、少しずつ変わっていった。今は「はじめまして」の代わりに、照れ隠しの「投げキス」を送る。

「蓮佳が人とかがわりを持ち、楽しみながら仕事をできるようになれば」。最近は、そんな将来像も描くことができる。

「今は心から産んでよかったと思える」。蓮佳ちゃんを見守るまなざしは柔らかく、温かい。

＊

台所の床に調理器具が散乱し、ティッシュは箱から抜き出されていた。「何回事ったら分かるの」。当時2

歳だった長男(8)に思わず手をあげた。届かない言葉と心。母親(36)から笑顔が消えた。

親子でたんぽぽに通い始めた。つらかった思いを、ほかの母親たちに打ち明けた。「私もそうだった」とうなずきながら聞いてくれた。心が軽くなった。

自宅でも長男と歌遊びをしたり、絵本を読み聞かせしたり、子育てを楽しむ余裕が生まれた。「たんぽぽは私のオアシスです」。母親はそう言い切った。

＊

7月中旬、たんぽぽの給湯室で笑い声が上がった。母親たちが担当する給食配膳。なぜか19日だけ希望者が殺到していた。この日のメニューはウナギのかば焼き。「みんな、余ったウナギが目当てだね」。たんぽぽに、母親たちの笑顔が咲いた。